



若築建設株式会社
常務執行役員名古屋支店長

刀根 幸晴 さん
とね・ゆきはる

1985年金沢大学工学部土木工学科卒、
若築建設入社。大阪支店次長、四国支店長、
執行役員名古屋支店長などを経て2025年
4月から現職。福井県出身、63歳。

あの頃、 思い出の現場

「橋湾火力発電所新設工事 護岸3工区 工事中連絡橋工事」

現場での経験は 後々生きてくる

徳島県阿南市で1995年2月から2年かけて行われた「橋湾火力発電所新設工事 護岸3工区 工事中連絡橋工事」の話をしましょう。電源開発と四国電力が離島の小勝島に火力発電所を新たに建設するための基盤を整備するのが主目的です。協

力会社の作業員が常時100人以上従事する大規模現場でした。着任時は入社10年目。33歳でした。

担当技術者として、島で最初に行ったのは測量作業でした。離島での測量は、陸地のように三角点を使うことができません。まだ珍しかったGPSを使った衛星測量で対応することにしました。当時の装置はまだ大きく、それを抱えて大変な思いをして島に渡りました。GPSでの測量は初めての経験でもあり、使い方もよく分かりません。仲間と共に説明書を読み込み、試行錯誤で作業したことを今でも覚えています。

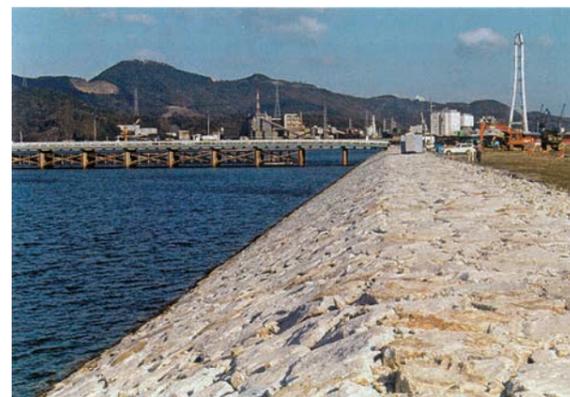
施工箇所は軟弱地盤でした。サンドコンパクションによる盛り上がり土を掘削して、所定の護岸断面を築造するのが当時の常識でした。これを経済性や工期などを考慮し、盛り上がり土の上に護岸を築造する方法に変更しました。盛り上がり土の検討とそれに伴う護岸の安定計算、サンドコンパクション打設後の複合地盤の圧密沈下量を従来の沈下版と併用してFEM解析を行い、施工上の余盛り量と背面側埋立時の水平変位量を算出しました。

解析作業は設計部に依頼して行い、その結果を現場施工にフィードバックしました。さまざまなことにチャレンジする現場の所長の思いもあって取り組んだことですが、大変勉強になる機会となりました。

所長の発案でそのほかにも、本来海上で施工する杭間のプレス材を陸上で箱形状に組み立ててユニット化したり、杭の打込精度を確保するために従来のトランシット誘導に加えて光波距離計による自動追尾杭打ちシステムを併用したりと、各種技術を積極的に取り入れました。

こうした新しい技術の活用を経験できたことは、その後携わることになる総合評価落札方式を採用した入札時の提案書づくりにも大いに生かされました。

現場で新しい取り組みに挑戦する一方、発注者からは工期の前倒しが求められました。特に延長約300mに及ぶ連絡橋は、建築工事やプラント工事を行う際の資機材搬入に利用することになります。火力発電所をできるだけ早く稼働させるためにも連絡橋の早期供用が必要だったのでしょう。また、阿南・室戸国定公園に属している現場は、平穏な海域で海象条件も恵まれていたのですが、



施工した護岸

海上汚濁や振動騒音への対応など地元住民への配慮も重視されました。

工事期間中、対岸の陸地に用意された敷地内に仮設の宿舎を造り、現場職員と作業員が共に寝泊まりして施工に従事しました。海上工事としては長い2年間に及ぶものでしたので、そうした環境での施工は「一つのチーム」になるという意味では最高であったと思います。宿舎には福利厚生として屋外にゴルフ練習場、屋内にはカラオケ付きのラウンジバーを設けたことが、コミュニケーションの醸成にも役立っていました。同時期に複数の現場が稼働していました。同じく宿舎を設けて施工に臨んでいましたが、同様の環境整備を行っていたようでした。

アイデアマンでもある所長の下、打ち合わせが夜まで及ぶことも多い厳しい現場ではありました。そうした中でも生活を共にして、何でも言い合えるような現場が運営できたことは、大きかったと思います。今のように働き方改革が求められる中で、打ち合わせが夜まで続くようなことはあってはならないことですが、風通しの良い職場づくりを経験できたことは、支店運営における考え方にもつながっています。発注者とも同じ土木技術者として一つの方向に向かって一緒に仕事できたことは大きな経験でした。

小勝島での施工から数年後に稼働となった火力発電所を見に行ったことがあります。当時何もなかった離島の様子を知っているだけに大変驚きましたが、その一端を施工者として担えたことは今でも誇りです。若い人たちには、仕事の中で経験したことは、後々絶対に生きてくると伝えたいですね。



現場の懇親会で(本人は3列目中央)